

令和5年度 研究報告書

自国史と世界史を関連付けて考察する高等学校「歴史総合」の授業開発
—単元「産業革命がアジアにもたらしたもの」を手がかりに—

指導教員

竹中伸夫 准教授

藤瀬泰司 教授

令和4年度入学

熊本大学大学院 教育学研究科

教職実践開発専攻 教科教育実践高度化コース

229-A9723 渡邊愛梨

目次

はじめに.....	1
第一章 なぜ「自国史と世界史を関連付ける」必要があるのか.....	3
第二章 実践授業とその評価.....	5
第三章 改善授業.....	19
おわりに.....	40
参考文献一覧.....	41
巻末資料.....	42

自国史と世界史を関連付けて考察する高等学校「歴史総合」の授業開発

—単元「産業革命がアジアにもたらしたもの」を手がかりに—

熊本大学大学院教育学研究科

教職実践開発専攻 教科教育実践高度化コース

229-A9723 渡邊愛梨

報告書要旨

本研究では、高等学校「歴史総合」の分野において、生徒が自国史、すなわち日本史と世界史を関連付けて考察することができる授業を開発することを目的としている。研究の背景には昨年度より始まった歴史総合の「近現代の歴史の変化に関わる諸事象について、世界とその中の日本を広く相互的な視野から捉え」という教科の特性がある。そもそも「自国史と世界史を関連付ける」とは、自国史、すなわち日本史と世界史を関連付けることであり、関連付けの方法として、日本史と世界史を比較したり、共通点を見つけたり、因果関係を見つけたりすることであり、両者をどのように組み合わせるかににおいて様々なバリエーションがある。

本研究では19世紀初めの「日本の開国」を関連付けの事例として取り上げ、2本の授業を開発した。1つ目の授業は、県内の公立高等学校で実際に実施した授業であり、関連付け方として、日本史と世界史の因果関係を考察する方法を採用した。「日本の開国」にはアメリカやロシアなど列強の思惑が絡んでいたことを説明する授業であった。結果として、多くの生徒は日本史と世界史を上手く関連付けることができていなかった。

そこで、1つ目の授業での反省を踏まえ、今度は関連付け方として日本史と世界史を比較する方法で授業改善を行った。この授業では清と日本の開国に対して、イギリスの関与の方法が異なることに着目した授業である。産業革命の結果としてイギリスは世界に貿易システムを築いていたが、清にだけ銀が流出していたため、その状況を改善するために清には戦争という強い圧力をかけた一方で、日本には貿易相手としての興味がなかったため、あまり関与してこなかったという授業構成である。

本研究の意義は歴史総合のという理念に基づき、授業開発ができたことにある。

一方で、生徒の既習事項の理解度を把握した授業設計が必要である、教材研究の成果をうまく反映できなかったなど課題も残った。

はじめに

本研究は、高等学校「歴史総合」の分野において、生徒が自国史、すなわち日本史と世界史を関連付けて考察することができる授業を開発することを目的としている。なぜこのような観点から授業を考える必要があるのか。その理由は学習指導要領が改訂され、昨年度より歴史総合が始まったためである。それ以前の高等学校の地理歴史科では、世界史が必修科目であり、日本史と地理は選択科目であった。なぜ世界史が必修だったのか。それはグローバル化に伴う世界史教育の重要性が挙げられる。世界史が必修化した当時から今もなお世界はグローバル化という大きな転換点を迎えている。「各国が独自の道を進んでいくという時代ではなく、国同士の相互依存関係がますます強くなっている」。「このような時代に対応していくには、世界各国のさまざまな考え方や生き方を知り、自国を相対化し、自国の特徴、長所、欠点を確かめることで、国際感覚を養っていく必要がある」ため、世界史は高等学校において必修化された。¹

しかし、グローバル化に対応していくためには、世界史を理解することだけで充分だろうか。グローバル化が進む現在求められるのは「世界史」か「日本史」かの二者択一ではなく、「グローバルな視野の中で現代社会とその中における日本の過去と現在、そして未来を主体的・総合的に考える」科目が必要であった。²それが歴史総合である。次章で詳しく述べるが、学習指導要領によると、歴史総合とは「近現代の歴史の変化に関わる諸事象について、世界とその中の日本を広く相互的な視野から捉え、資料を活用しながら歴史の学び方を習得し、現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史を考察、構想する」科目である³。

また、前述した通り歴史総合は昨年度より始まった科目である。それ以前は日本史と世界史はバラバラに教えられていた。すなわち日本史と世界史を関連付けるにはどうしたらよいのか、など教育現場においても疑問が残る。以上のことから、歴史総合の授業において、日本史と世界史を関連付ける授業の実践は、始まったばかりで十分だといえない。

そこで本研究は、自国史、すなわち日本史と世界史を関連付けて、世界の中で日本がどのよ

¹ 矢吹芳洋『高校社会科の「再編」と世界史必修をめぐって』専修大学社会科学研究所月報、1991年、12ページ。

<http://www.senshu-u.ac.jp/~off1009/PDF/geppo1991/smr338.pdf>
(閲覧日2024年1月12日)

² 『提言「歴史総合」に期待されるもの』日本学術会議史学委員会高校歴史教育に関する分科会、2018年、要旨 ii <https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-23-t228-2.pdf>(閲覧日2024年1月11日)。

³ 文部科学省『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 地理歴史編』125ページ。
https://www.mext.go.jp/content/20220802-mxt_kyoiku02-100002620_03.pdf(閲覧日2024年1月11日)

うな位置づけだったのかを生徒が考察する授業の開発することを目的とした。関連付ける授業を行う事例として、幕末期の日本の開国を取り上げる。この単元は教科書の記載によれば、「中国の開港と日本の開国」という単元名がつけられているように、日本史と世界史を関連付けることがあらかじめ意図された単元だととらえることができる。また、日本の開国に関しては中学校の時にも学習するが、中学校歴史分野は、日本の歴史の大きな流れを世界の歴史の背景に学ぶことにとどまり、関連付けのニュアンスは薄い。しかし、歴史総合は世界とその中の日本を広く相互的な視野から捉える科目であり、既存の知識を部分的に活用しつつも、従前とは異なる学習を展開することとなり、その差が明確に示せる教材であると考えられる。

以上のような目的を実現させるために、第1章では、日本史と世界史を関連付けることの意義を、学習指導要領をもとに考察し、どのような授業を開発すべきかについて考える。第2章では、第1章をもとに考えた授業を実践し、その結果をまとめる。第3章では、第2章で実践した授業をどのように改善すれば、より生徒が日本史と世界史を関連付けることができるかを考察し、改善案を提起する。おわりにでは、本研究の意義と課題について述べる。

第1章 なぜ「自国史と世界史を関連付ける」必要があるのか

第1章では、なぜ「自国史と世界史を関連付ける」必要があるのか、その根拠を学習指導要領をもとに考察することを目的としている。「はじめに」でも述べたとおり、歴史総合は昨年度より新たに新設された教科である。高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説地理歴史編には以下のような記述がある。「歴史総合」における改善・充実の要点では、「Ⅰ 歴史の大きな変化に着目し、世界とその中の日本を広く相互的な視野から捉える内容の構成」とある。また、別箇所には

「(1)近現代の歴史の変化に関わる諸現象について、世界とその中の日本を広く相互的な視野から捉え、現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史を理解するとともに、諸資料から歴史に関する様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする。」(中略)近現代の歴史の変化に関わる諸事象について、世界とその中の日本を広く相互的な視野から捉えとは、「歴史総合」の学習の中心が、世界とその中の日本の相互作用や、それぞれの独自性、お互いの共通点などの諸点から、世界とその中における日本の過去と現在を考察することにある⁴

との記載がある。つまり、高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説地理歴史編においても、「自国史と世界史を関連付けること」を意識した授業は求められているといえる。

「自国史と世界史を関連付ける」といってもその手法は様々である。AとBを並置するパターン、AとBを対比するパターン、AとBの間の直接的因果関係を考えるパターン、AとBに隠れた因子、Cを加えて、A、B間の相関関係を考えるパターン、AとBの相関関係を考えることにおいて前者と同じだが、隠れた因子を複数加え、隠れた因子C、D間の因果関係なども複合的に考察するパターンなどが具体的には考えられる。今回は県内の公立高等学校で実施した授業では、AとBの直接的因果関係を考える授業を実施した。この方式は中学校歴史分野の学習方略をより直接的に強化したものと言え、生徒の既有知識を生かしやすいものであるため採用した。

また、今回授業を開発した単元の学習指導要領には以下のような記述がある。

(2)結びつく世界と日本の開国

諸資料を活用し、課題を追及したり解決したりする活動を通して、次の事項を身に付けることができるように指導する。

ア (イ)産業革命と交通・通信手段の革新、中国の開港と日本の開国などを基に、

工業化と世界市場の形成を理解すること

(中略)

⁴ 高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 地理歴史編、125ページ。

イ (イ)産業革命の影響、中国の開港と日本の開国の背景とその影響などに
着目して、主題を設定し、アジア諸国とその他の国や地域の動向などを
比較したり、相互に関連付けたりするなどして、アジア諸国と欧米諸国との
関係の変容などを多面的・多角的に考察し、表現すること⁵

以上のことから、清および日本の開国を事例に世界史と関連付けた授業の開発が求められることがわかる。その中でも特に産業革命を1つのキーワードとして、授業に組み込む必要性があるといえる。

次の章では、日本史と「産業革命」をキーワードとした世界史がどのように結びついた授業を開発し、実施したので、その実際について述べたい。

⁵ 高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 地理歴史編、143ページ。

第二章 実践授業とその評価

【資料1】令和5年度に実践した授業の学習指導案

第2学年 歴史総合 学習指導案

2023年7月19・20日第1・3校時

対象 2年1・2組

指導者 渡邊愛梨

I. 単元名「中国の開港と日本の開国②③」 岸本美緒、鈴木淳『歴史総合 近代から現代へ』山川出版社、2022 年、pp.61-65。

II. 単元の目標

- (1)日本が開国した理由に外国の思惑が影響していることを理解できる(第1次)
- (2)外国の接近に合わせて、日本が対応策を改めていったことが理解できる(第1次)
- (3)開国後の影響について、経済的要因・政治的要因の2つの側面から理解できる(第2次)

III. 単元の構想

次	MQ	MA
1	外国の接近に対する日本の対応が 変化したのはなぜか	初期は異国船打ち払い令で、日本に近づく 外国船を打ち払っていたが、アヘン戦争で の清の敗北や外国に侵略の理由を与えな いたために天保の薪水給与令に改め、外国船 の求めに応じてはいたものの、「鎖国」状態 は守っていた。しかし、ペリー来航をはじめ とする列強の強気な行動にもはや開国す るしかなくなったため。
2	2つの条約は日本にどのような影響 を、なぜ与えたのか	開国したことにより、経済面では金の流出 に伴い、物価が急騰したり、海外製品との 競争で国内産業が衰退したりするなど 人々の生活が苦しくなった。人々はこの原 因を外国に求め、攘夷運動は盛り上った。 また政治面では、朝廷や諸大名の発言 力が強まり、反対に幕府の権威が失墜し、 ついには倒幕の動きが見られ始めた。

IV. 学習指導案(◎MQ)

〈第1次〉

	発問	教授学習活動	資料	予想される生徒の反応
導入	○振り返りシートの記入 【学習前】「日本はなぜ開国したのか」	T 指示する S 記入する	I	・ペリーが日本にやってきたから
	○19 世紀以降日本に外国の船が多く接近するようになったことを説明する	T 説明する	II	
	・なぜ米露は日本に接近するようになったのだろうか、その思惑はなんだろうか	T 発問する S 答える	III	・アメリカ:国境が太平洋側に到達した 野蛮国(日本)の排撃 ・ロシア:不凍港の獲得
	・両国に共通する思惑はなんだろうか	T 発問する S 答える		・市場の獲得 ・技術革新
	◎外国に対する日本の対応が変化したのはなぜか			
展開	○「異国船打ち払い令」「天保の薪水給与令」それぞれの内容について確認する	T 説明する		
	・なぜ幕府は上記のように対応を改めたのだろうか	T 発問する S 答える		・アヘン戦争で清がイギリスに徹底的にやられてたことを伝え聞き、外国の脅威に気づいたため
	○「外国に侵略に理由を与えないため」という理由についても追加で説明する	T 説明する		
	○ペリー来航から日米和親条約	T 説明する		

	締結までの流れを説明する			
終 結	◎外国に対する日本の対応が変化したのはなぜか	T 発問する S 答える		初期は異国船打ち払い令で、日本に近づく外国船を打ち払っていたが、アヘン戦争での清の敗北や外国に侵略の理由を与えないために天保の薪水給与令に改め、外国船の求めに応じてはいたものの、「鎖国」状態は守っていた。しかし、ペリー来航をはじめとする列強の強気な行動にもはや開国するしかなくなったため。

〈第二次〉

	発問	教授学習活動	資料	予想される生徒の反応
導 入	・日米通商修好条約の内容にはどのようなものがあったか ◎2つの条約は日本にどのような影響を、なぜ与えたのか	T 発問する S 答える T 発問する		・領事裁判権がない ・関税自主権がない
展 開	○経済的な影響について説明する ・主にどこの国とどこで貿易が行われていたか ○政治的な影響について説明する ・井伊直弼の登場以降、薩長が倒幕に向けて動き出すまでの過程について説明した	T 説明する T 発問する S 答える T 説明する	Ⅲ	・イギリスと横浜
終	◎2つの条約は日本にどのような影響を、なぜ与えたのか	T 発問する		開国したことにより、経済

結	な影響を、なぜ与えたのか	S 答える		面では金の流出に伴い、物価が急騰したり、海外製品との競争で国内産業が衰退したりするなど人々の生活が苦しくなった。人々はこの原因を外国に求め、攘夷運動は盛り上がった。また政治面では、朝廷や諸大名の発言力が強まり、反対に幕府の権威が失墜し、ついには倒幕の動きが見られ始めた。
---	--------------	-------	--	---

【資料2】授業時に使った資料・ワークシート

I 振り返りシート

振り返りシート「中国の開港と日本の開国②、③」教科書p61～p65, ノート p40～p43

組 名前()

【学習前】なぜ日本は開国したのか

--

	7月 19日(1時間目)	7月 20日(2時間目)
【課題】の答え		
今日一番重要 だと思 ったところ		
今日の気 づき・感想		

【学習後】なぜ日本は開国したのか

--

全体を通じて感想などあれば自由に！

--

Ⅱワークシート

補足プリント①「中国の開港と日本の開国②③」(教科書p61～p65, ノート p40～p43)
〈日本に接近した外国船の数〉①



〈アメリカの思惑〉

〈ロシアの思惑〉

〈2つに共通する思惑は?〉

【7/19の課題】

〈日本の対応〉

①	②	③	④
時期			
内容			
なぜ?			

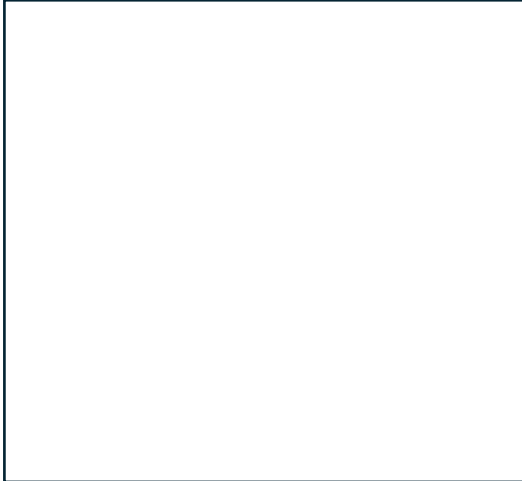
【7/20の課題】

Ⅲ資料プリント

補足プリント②「中国の開港と日本の開国②③」(教科書p61～p65, ノート p40～p43)

【7/19日分】

〈アメリカの場合〉



②

「アメリカはメキシコ戦での勝利、オレゴン領有、カリフォルニアのゴールドラッシュや西部開拓など、従来西半球に限られたアメリカの「明白な運命」は、神に与えられた使命として太平洋を越えたアジアに向けられるのである。」

○③「タイムズ」、「アメリカからの通信」(1852年3月26日)

「日本は外国との通商関係を結ぶことを拒否しているだけでなく、外国の船舶が遭難した時にすら港に入ることを拒否し、海岸に近づくと砲撃する。そして、暴風のために、海岸に漂着すると乗組員を捕虜にし、投獄して、実際に殺してしまうこともある。世界の海岸の一部を占有しているどの国も、ほかの国とのあらゆる通商関係を拒否する権利は有しない。このような権利を侵害する野蛮国を排撃することは文明国およびキリスト教の任務である。(中略)アメリカ政府はヒューマニティの立場から日本この態度を改めさせるべきである」

④〈ロシアの場合〉

ロシアはその広大な国土のため、かねてより小麦の栽培が盛んであり、当時小麦を他国に大量に輸出することで、利益(産業革命の資金など)を確保しようとしていた。しかし、それには大きな問題があった。小麦の収穫は秋であるにも関わらず、ロシアは高緯度地域に属するため、秋ごろから港が凍ってしまうのだ。つまり、小麦を大量生産できたとしても輸出の方法がないのである。そのため歴史上ロシアは「不凍港」を探し求めることになるのだ。

⑤〈共通の要因①〉

「通商条約をアジア諸国と締結すれば太平洋におけるアメリカの貿易拡大の道が開かれよう。工業製品が国内市場で飽和状態である中、余剰製品の対アジア輸出が強調される。また物価指数が落ち込む中、対外貿易の拡大は誰の目にも簡単な万能薬に移るのである」

〈共通の要因②〉

	期間
マゼランら	世界一周に約3年
ペリー	日本に来るまで7か月



〈異国船打ち払い令から天保の薪水給与令へ〉

⑥異国船打ち払令(1825年)

(前略)もともとイギリスに限らず、ポルトガル、イスパニアなど西洋の国々は日本で禁止されているキリスト教の国であるので、今後はどこの海辺の村でも、外国船が近付いたら、その場に居合わせた者達で迷わず打ち払い、逃げた場合は船を出して追う必要なくそのままが良い。もし強硬に上陸してきたならば捕縛しても打ち殺しても構わない。本船が近寄ってきたならば、打ち壊すにしても何にしても臨機応変に実行すべきであるということを末端まで相談し、おってその事を届ける様に改めて通達する。



⑦天保の薪水給与令(1842年)

外国船が渡来してきたとき、迷うことなく打ち払うべきことを文政8年(1825年)に命じられた。しかしながら、(中略)外国船でも暴風に合い、漂流して食物や薪水を求めて渡来した場合、その事情のわからないままに、ひたすら打ち払っては、すべての国に対する適切な処置とは言えないとお考えになった。(中略)そこで外国船を見受けたならば、よく事情を取り調べ、食料・薪水などが不足して帰国することが困難な場合は、望みの品を適切に与え、帰国するように言い聞かせよ。ただし、上陸させてはならない。しかし、このように命じられたことについて、海岸の防御の準備をおろそかにし、適切な対応策を誤り、またむやみに外国人と親しくなるようなことをしてならないし、警備面についてはいよいよ厳重にし、人数・武器の準備などはこれまでよりも手厚くし、いささかも心配のないように心得るべきである。

【7/20日分】

○どこの国とどこで貿易が行われたのだろうか…⑧

(貿易相手:)

(場所:)

『新詳歴史総合』、浜島書店、2022 年、p.75。

○ 日本で起こった困ったこと① …⑨

当時の日本では3種類のお金(金・銀・銭(銅))
が用いられていた。なかでも、金貨と銀貨を交換する
職業があり、それが両替商だった。

当時、金と銀の交換レートは重量比でほぼ「1:5」
というレートだった(金を 100g持っていくと、銀
500gと交換してくれる)。ところが、開港により困
った問題が起きた。世界(最も近くでは香港)市場で
の、金と銀の交換レートが重量比でほぼ「1:15」(金
を 100g持っていくと、銀 1500gと交換してくれ
る)だった。

この違いを利用して、外国商人はたくさん儲けた。
どのような手法を使っただろうか？

『新詳歴史総合』、浜島書店、2022 年、p.75。

指導案資料一覧

①山川&二宮 ICT ライブラリ(閲覧日2023年 7 月5日)

②奥田和彦「東アジアにおける国際関係(Ⅱ)ー日本開国の政治と外交」、フェリス女学院大学
学術機関リポジトリ

<https://www.google.com/url?sa=t&rct=j&q=&esrc=s&source=web&cd=&ved=2ahUKEwiovfqMqLaCAxUGbPUHHb0bBLwQFnoECBcQAQ&url=https%3A%2F%2Fferris.repo.nii.ac.jp%2Frecord%2F2631%2Ffiles%2F11001960.pdf&usg=AOvVaw0MCGh5MNdDB1A8vP02VmTx&opi=89978449>
(閲覧日2023年 11 月9日)

③小風秀雅「19世紀の世界と東アジアー不平等条約体制の機能についてー」お茶の水女子大学
教育・研究コレクション“TeaPot”

https://www.google.com/url?sa=t&rct=j&q=&esrc=s&source=web&cd=&ved=2ahUKEwiBqbrEqbaCAxVZeXAKHXRRcz4QFnoECA0QAQ&url=https%3A%2F%2Fteapot.lib.ocha.ac.jp%2Frecord%2F6585%2Ffiles%2Fed114.pdf&usg=AOvVaw0g2fFfwu76zh_AllPluXEG&opi=89978449
(閲覧日2023年 11 月9日)

④『高校世 B 5分でわかる！ロシアがこだわった南下政策とは？』『Try IT』
<https://www.try-it.jp/chapters-11824/lessons-11825/>(閲覧日2023年 11 月9日)もとに授業者作成

⑤奥田和彦「東アジアにおける国際関係(Ⅱ)ー日本開国の政治と外交」フェリス女学院大学
学術機関リポジトリ

<https://www.google.com/url?sa=t&rct=j&q=&esrc=s&source=web&cd=&ved=2ahUKEwiovfqMqLaCAxUGbPUHHb0bBLwQFnoECBcQAQ&url=https%3A%2F%2Fferris.repo.nii.ac.jp%2Frecord%2F2631%2Ffiles%2F11001960.pdf&usg=AOvVaw0MCGh5MNdDB1A8vP02VmTx&opi=89978449>
(閲覧日2023年 11 月9日)

⑥『最新日本史図表』『日本史重要史料215』第一学習社、30ページ。

⑦『最新日本史図表』『日本史重要史料215』第一学習社、30ページ。

⑧『新詳歴史総合』、浜島書店、2022 年、75 ページ。

⑨『新詳歴史総合』、浜島書店、2022 年、75 ページ。

本授業は熊本市内の県立高校の2クラスで単元「中国の開港と日本の開国」(『歴史総合 近代から現代へ』山川出版社、2022年、pp.61-65)を二時間構成で行なった。まずは、行なった授業の概要について説明する。本授業は、日本の開国は日本国内の事情だけではなく、外国の思惑も絡んで開国に至ったことを生徒にわからせることを狙いとした授業である。

授業を行う前に生徒の現時点での認識を確認するために「なぜ日本は開国したのか」という簡単な質問を行っている。

第一次では「外国が日本に近づいてきた理由を考察する段階」とした。「外国の接近に対する日本の対応が変化したのはなぜか」をMQと設定し、「初期は異国船打ち払い令で、日本に近づく外国船を打ち払っていたが、アヘン戦争での清の敗北や外国に侵略の理由を与えないために天保の薪水給与令に改め、外国船の求めに応じてはいたものの、「鎖国」状態は守っていた。しかし、ペリー来航をはじめとする列強の強気な行動にもはや開国するしかなくなったため。」という MA を想定し、授業を行なった。この授業では、「外国は様々な思惑をもって、日本に開国を迫ったこと」と「外国の脅威を感じ、日本はもはや開国は避けられないと感じたこと」の2点を理解させることを到達点としている。

授業の導入部分では、18世紀後半以降日本に近づいてきた外国(ロシア、イギリス、アメリカ、フランス、その他)船の接近数を示すグラフを提示し、19世紀を境に日本に外国船が多く近づくようになったことを理解させる。次にアメリカとロシアが日本に近づいてきた思惑を、資料を基に考察させる。その結果、アメリカとロシアにそれぞれの思惑があったこと、両者共通の思惑があったことを理解させる。その結果、両者の思惑として国内で産業革命がおこり、技術革新が起こった結果、蒸気船が開発され、海外進出が容易になったという産業革命的要因、また産業革命がおこった結果国内市場だけでは生産した商品が売れなくなったため、その製品を売る相手を探し、市場の拡大を図ろうとしていたという帝国主義的要因の2つがあったことを理解させる。つまり、この段階ですでに日本の開国には外国の思惑が絡んでいたことを示唆するのである。

次に授業の展開部分では、「異国船打ち払い令」(1825年)、「天保の薪水給与令」(1842年)の2つの資料を提示し、その違いについて考えさせる段階とした。「異国船打ち払い令」では、「外国船が日本に近づいてきた場合、容赦なく打ち払って構わない。必要であれば撃ち殺しても構わない」という強気な内容を掲げているのに対し、「天保の薪水給与令」では「外国船が近づいてきた場合、薪水を与え、速やかに帰国を促す」という弱気な内容に変わっていることから、約20年の間になぜこのように幕府の対応に変化が生まれたのか生徒に疑問を持たせた。その結果、1842年に隣国清でアヘン戦争がおこり、清がイギリスに大差で負けてしまったことを伝え聞き、日本も外国の脅威を知り、対応を改めたことを前時に学習したことをもとに導き出した。また、補足として、授業導入時に提示したアメリカの思惑についての資料を再度提示し、日本側が強気な対応をとっていると外国にそれを口実にいつ攻撃されるかわからないという、外国に侵略の理由を与えないためにも対応を改めたことを説明した。その後、1853年ペリー来航により、日米和親条約を締結し、日本は開国することになったことを説明した。

終結では、再度MQを提示し、授業の内容をもとに生徒に答えを考えさせた。

第一次を踏まえ、第二次では「開国後、日本に起こった影響について考察する段階」とした。「2つの条約は日本にどのような影響を、なぜ与えたのか」をMQとして設定し、「開国したことにより、経済面では金の流出に伴い、物価が急騰したり、海外製品との競争で国内産業が衰退したりするなど人々の生活が苦しくなった。人々はこの原因を外国に求め、攘夷運動は盛り上がった。また政治面では、朝廷や諸大名の発言力が強まり、反対に幕府の権威が失墜し、ついには倒幕の動きが見られ始めた。」をMAと想定した。この授業では「日本は開国の結果、経済的な要因、政治的な要因で影響を受けたこと」を理解させることを到達点としている。

授業の導入部分では日米和親条約に続いて、日米修好通商条約が結ばれたことを説明し、この条約が日本には「関税自主権がない」「領事裁判権がない」という不平等条約であり、この条約をアメリカ、イギリス、フランス、ロシア、オランダの5カ国とも締結したことを説明した。

授業の展開部分では、前半部分で経済的な要因について説明した。日本と外国では金銀の交換レートが違ったために、日本からの多くの金の流出したことにより、日本国内では深刻なインフレが起こったこと、外国に輸出するために商人が物品を買い占めたことにより、物価が高騰したこと、外国製品（主にイギリス産綿織物）が大量に流入したことより、国内産業が衰退したことを説明し、開国により日本は経済的に悪い影響を被ったことを説明した。授業の後半では政治的な要因として、安政の大獄、桜田門外の変から薩長同盟に至るまでの流れを、幕府、雄藩であった薩摩藩、長州藩の3つの動きに分けて説明し、最終的に2つの藩が討幕を考えるようになったことを説明し、政治的な面でも悪い影響を被ったことを説明した。

終結では、再度MQを提示し、授業の内容をもとに生徒に答えを考えさせた。

また授業の終わりには、二時間の授業を経て、生徒の考えがどれだけ変容したかを見るために、授業前に取った「なぜ日本は開国したのか」という質問を再度行なった。

本授業では授業の振り返りアンケートに書かれた設問に対して、授業前後で同じ内容の質問をし、回答の変化から学習内容を理解しているかを調査した。設問の内容は、前述の通り「なぜ日本は開国したか」である。評価の対象となるのは、授業を実施した2クラスの77名である。そのうち有効回答数は40名であった。

今回の授業は「世界とのかかわりという視点」での授業開発であり、A・B⁺・B・B⁻・Cの5段階で評価した。そのため、授業を2時間受け、開国後、日本国内の情勢が不利になったこと（不平等条約の改正に時間がかかったこと、金が流出した、幕府の権威が低下したなど）を踏まえた上で、外国に押し負けて開国したことが記述できていればA評価、外国との関わりの中で開国したことを踏まえて記述ができていることに加え、授業で取り扱った「アヘン戦争により外国の脅威に気づいた」「外国に侵略の理由を与えないため」という要素のいずれかが記述されていた場合、B評価の中のいずれかをつけている。詳しい評価基準については、下記の表1に記載している。

【表1】授業後アンケートの評価基準

評価	評価基準
A	授業後、日本が開国した理由について、開国の悪影響も踏まえて、外国に押し負けたという視点で記入している。
B ⁺	授業後、日本が開国した理由について、授業中に習った2つの外国との関わりを踏まえて記入している。
B	授業後、日本が開国した理由について、授業中に習ったいずれか1つの外国との関わりを踏まえて記入している。
B ⁻	授業後、日本が開国した理由について、外国との関わりという視点を踏まえて記入している。
C	授業後、日本が開国した理由について、日本側の視点からだけで記入している。

以上を踏まえ分析を行ったところ、結果は表2のようになった。

【表1】授業後アンケートに結果

評価	評価基準	人数
A	授業後、日本が開国した理由について、開国の悪影響も踏まえて、外国に押し負けたという視点で記入している。	0
B ⁺	授業後、日本が開国した理由について、授業中に習った2つの外国との関わりを踏まえて記入している。	2
B	授業後、日本が開国した理由について、授業中に習ったいずれか1つの外国との関わりを踏まえて記入している。	19
B ⁻	授業後、日本が開国した理由について、外国との関わりという視点を踏まえて記入している。	10
C	授業後、日本が開国した理由について、日本側の視点からだけで記入している。	9

また、各評価に該当する生徒の回答は表3に記載した。

【表3】授業後アンケートの生徒の回答例

評価	生徒の解答例
B ⁺	清がアヘン戦争に負けたことなどから、外国を警戒するようになり、外国に侵略の理由を与えないため。
B	清がアヘン戦争に負けたことをきっかけに開国の動きが強まり、アメリカとの2つの条約で開国した。
B ⁻	外国船などがたびたび来るようになり、外国の力を知ってそれをおそれた日本は開国せざるをえなかった。

C	貿易の市場拡大を図るため。
---	---------------

上記の視点から分析を行ったところ、以下の3つのことが言える。すなわち、「授業2時間を踏まえて回答した生徒がいなかったのはなぜか(1時間目に習ったことのみで回答している生徒が多いのはなぜか)」、「授業で説明したポイントを踏まえて回答した生徒が2人だけだったのはなぜか」、「なぜ C 評価が9人もいたのか」である。特に最後の「なぜ C 評価が9人もいたのか」に関しては、日本史をベースとして、それに補足するような形で世界史を織り込んだからではないかと考えられる。すなわち、文献によると「中学校の歴史教育においては、日本史を学ぶため最小限必要な知識を整理しておくという範囲で世界の動きが触れられるにとどまり、世界史全体の流れを理解することは目指されていない。」といえる⁶。既存の知識の実態が上記のような状況にある生徒たちに、その既存の知識を獲得した際の学習方略と類似の方略(直接的に強化したもの)を用いて授業を行うと、部分的には似通った授業となり、既存の知識を修正する意欲を喚起しにくい。結果として、歴史総合のために付け加えた知識を考慮することなく、アンケートに答えたものと推察される。そのため「歴史総合」においては、近現代を中心に「世界史全体の流れを理解するとともに、その中での日本の位置づけを学ぶこと」⁷、すなわちこれまでとは全く異なる学習方略を取ることが重要となる。さらに、その際、単に日本と外国の関係史だけを見るのではなく、日本史と外国の比較史で見るという関連付け方が重要である⁸。では、どのような授業構成にすれば、生徒に「世界との関わり」を意識させる授業にできるのか、次章で考察していく。

また少数とはいえ、B+の生徒がいたため、「日本の開国」について外国の思惑を意識した授業づくりができたといえる。ただし、生徒に思考させる時間が少なかった点、「日本と世界との関わり」を意識させるためにより外国の思惑を強調する必要がある点、日本以外の国が欧米列強の進出にどのような対応をしたかを知り、比較することで日本の対応を総体的に評価できたのではないかという点が挙げられる。

すなわち今回行った授業を改善するために「生徒に資料を提示し、考えさせる時間を設けること」、「外国の思惑を強調し、それと日本にどのようなつながりがあったかにふれること」、「欧米列強との関わり方を他国と比較すること」に加え、中学校の学習方略とは全く異なる授業を構築すべきと考えられる。次章では、この授業の改善授業について考えていきたい。

⁶『提言「歴史総合」に期待されるもの』日本学術会議史学委員会高校歴史教育に関する分科会、2018年、12ページ。

⁷『提言「歴史総合」に期待されるもの』日本学術会議史学委員会高校歴史教育に関する分科会、2018年、12ページ。

⁸『提言「歴史総合」に期待されるもの』日本学術会議史学委員会高校歴史教育に関する分科会、2018年、12ページ。

第三章 改善授業

【資料3】改善した授業の学習指導案とその資料

改善授業 学習指導案

I. 構想したした単元

「産業革命がアジアにもたらしたもの」

II. 単元の構想

次	MQ	MA
1	◎欧米の接近の結果、清と日本にはどのような変化があっただろう	◎清は戦争により開国させられ、列強の植民地のような状態になったのに対し、日本は条約により開国し、不平等な条約を結ぶだけにとどまった
2	◎なぜイギリスはアヘンが害のあるものとみなしながら、清に売りつけているのだろうか	◎イギリスは清に一方的に銀が流出していた状況を食い止めるため、インド産のアヘンを利用し、銀を回収しようとしたため
3	◎イギリスはなぜ清と日本で開国させるための方法を変えたのだろうか	◎清はイギリスが構築していた世界的貿易システムの中の重要なパーツであったため、(銀が流出していたため)絶対に抑えておかなければならないピースであった。一方で日本は、貿易に関する興味はなく、ロシアの南下を防ぐために支配しただけにすぎなかったため、対応が甘かった。

III. 学習指導案

〈第一次〉

	発問	教授学習活動	資料	予想される生徒の反応
導入	・青図はイギリスの勢力図と世界の関係を示した図である。次のターゲットはどこだろう	T 発問する S 答える	① I	・(オールコック)極東地域

	・次の資料からどのようなことが読み取れるだろう ・次の資料から何が読み取れるだろう ○実際にアジア地域に欧米が近づいていたことを理解させる ◎欧米の接近の結果、清と日本にはどのような変化があっただろう	T 発問する S 答える T 発問する S 答える T 発問する	② ③	・日本に近づく外国船の数が増えた ・清皇帝に謁見するイギリス使節(マカートニー、アマースト)
展開 1	○中国の結果について説明する ○朝貢関係について説明する →マカートニーの来日 ・マカートニーは当初清をどのように見ていただろうか ・半年後、マカートニーの清への評価はどう変化しているだろうか ・その後、マカートニーの交渉はどうなったか ○アヘン戦争・アロー戦争の経過について説明する ・アヘン戦争、アロー戦争の結	T 説明する T 説明する T 発問する S 答える T 発問する S 答える T 発問する S 答える T 説明する T 発問する	④ ⑤ ⑥ ⑦	・評価が高い ・世界有数の国の一つ ・かなわない ・下がっている ・衰退に向かってしていると捉えている ・失敗した ・イギリスやフランスの植民

	果、清はどうなったか ・中国はどのようにして開国したか ・中国を開国させるために中心となった国はどこか	S 答える T 発問する S 答える T 発問する S 答える		地のような状態になっている (ロシアに沿海州もとられている) ・戦争による開国 ・イギリス
展 開 2	○日本の結果を説明する ・フェートン号事件 (イギリスの関与、日本関係なし) ・ラクスマン、レザノフの接近 (ロシア接近の示唆) ・異国船打ち払い令から天保の薪水給与令への変化 ・日米和親条約、日米修好通商条約による開国 →安政の五カ国条約 ・日本はどのようにして開国したか ・日本を開国させるための主体となったのはどこの国か	T 説明する T 発問する S 答える T 発問する S 答える		・条約による開国 ・アメリカ
終 結	・両者の開国の背景の違いにはどのような考え方があっただろうか ・イギリスはなぜ圧力のかけ方を日本と清とで分けたのだろうか ○両者の開国の背景の違いについて示唆しておく	T 発問する S 答える T 発問する	①	・交渉→圧力

	◎欧米の接近の結果、清と日本にはどのような変化があっただろう	T 発問する S 答える		◎清は戦争により開国せられ、列強の植民地のような状態になったのに対し、日本は条約により開国し、不平等な条約を結ぶだけにとどまった
--	--------------------------------	-----------------	--	--

〈第二次〉

	発問	教授学習活動	資料	予想される生徒の反応
導入	○復習 ・アヘン戦争の結果、どのようなことが認められただろうか ・そもそもアヘンはどのようなモノだろうか ・アヘン貿易の結果、清にはどのような困ったことが起こっただろうか ・イギリスはアヘンをどのようなものとして認識しているだろうか ◎なぜイギリスはアヘンが害のあるものとみなしながら、清に売りつけているのだろうか	T 発問する S 答える T 発問する S 答える T 発問する S 答える T 発問する S 答える T 発問する	① ② ③	・アヘン貿易の合法化 ・中毒性の高い麻薬 ・アヘン中毒者増加による貿易量の増加 ・銀の流出 ・害あるもの
展開 1	・当時のイギリスの主要な輸出品は何だろう ・なぜイギリスは綿織物を大量に輸出することができたのだろうか	T 発問する S 答える T 発問する S 答える	④	・綿織物 ・産業革命がおこり、機械が発達し、生産力がアップしていたため

	・イギリスは主にどこに綿織物を輸出していただろうか ・生産力が上がっただけで、安く大量に生産できるようになるか ・イギリスはそうにして安く綿花を仕入れていたか ・そのプランテーション経営を支えたのは誰だろう ・以上のような貿易システムを使ってイギリスはどのように儲けていただろうか	T 発問する S 答える T 発問する S 答える T 発問する S 答える T 発問する S 答える T 発問する S 答える	Ⅱ ・植民地であったインド 原料となる綿花も安く仕入れられることができるようにならない ・植民地であった西インド諸島、アメリカ南部で大規模なプランテーション経営を行い、大量生産していた ・アフリカ大陸から連れてこられた黒人奴隷 ・植民地で奴隷制プランテーションを行い、大量生産した綿花を安価で仕入れ、本国で大量生産し、植民地であったインドに大量に売りつけた
展開 2	○片貿易の様子を見せる ・これはどのような貿易か ・なぜイギリスは清に綿織物を売らなかったのだろうか ・そのほかに輸入するものはなかったのだろうか ・その結果、イギリスは何を清に輸出したのだろうか	T 発問する S 答える T 発問する S 答える T 発問する S 答える T 発問する S 答える	Ⅲ ・イギリスが清から茶や陶磁器を一方向的に輸入する関係 ⑤ ・清では既に綿織物の生産が行われており、外国産を輸入すると割高になるため、輸入しなかった ⑥ ・当時の清は豊かであったため、外国から輸入する必要はなかった ・銀(一方向的な購入であった)

	・一方的に銀が流出すると何が困るのだろうか ○そのほかに輸出品がなかったため、イギリスはインド産のアヘンを利用したことを理解させる ・インドからアヘンを輸出することで、貿易にはどんな変化が生じただろう ○南京条約等の結果、アヘン条約が合法化したことを再確認 ・植民地インドをイギリスはどのようにして利用していただろう ・つまり、イギリスとインドの間ではどのような銀の動きがあっただろうか ○イギリス、清、インドの関係をまとめてみよう、イギリスはどのようにして儲けていただろうか ○展開1の貿易システムに清を組み込むと、イギリスはどんな儲け方をしていたことがわかるか	T 発問する S 答える T 発問する S 答える T 説明する T 発問する S 答える T 発問する S 答える T 発問する S 答える T 発問する S 答える	III IV	・国内の銀の量が減る、イギリスは儲けたいのに利益が減ってしまう ・茶・陶磁器の購入でイギリスから清に銀が、アヘンの購入で清からインドの銀が流れた ・国内で飽和した綿織物を大量に輸出していた ・綿織物の購入で、インドからイギリスに銀が流れた ・インドから中国にアヘンを輸出し、銀を得る ・その銀を綿織物を大量に輸出することで回収する ・イギリスはアメリカ大陸から安価な綿花を大量に輸入し、本国で加工し、インドに大量輸出した結果、清からの銀の流出を食い止めることに成功した
終	◎なぜイギリスはアヘンが	T 発問する		◎イギリスは清に一方的に

結	害のあるものとみなしながら、清に売りつけているのだろうか	S 答える		銀が流出していた状況を食べ止めるため、インド産のアヘンを利用し、銀を回収しようとしたため
---	------------------------------	-------	--	--

〈第三次〉

	発問	教授学習活動	資料	予想される生徒の反応
導入	・なぜイギリスは日本にアヘンを輸出しなかったのか (確認) ・当時の日本の貿易相手国の一位はどこだろう ・イギリスは日本に何を輸出していただろう ・日本ではイギリスの思惑はかなっていたといえるか ・それはなぜか (一時間目の示唆より) ◎イギリスはなぜ清と日本で開国させるための方法を変えたのだろうか	T 発問する S 答える T 発問する S 答える T 発問する S 答える T 発問する S 答える T 発問する S 答える T 発問する	①	・アヘンを輸出しなくても簡単に貿易ができた ・イギリス ・毛織物、綿織物 ・いえる ・アヘンに頼らなくても、主要輸出品であった綿織物を大量に輸出することができたため
展開 1	・外国は日本でどのように儲けていたのだろうか ○外国の日本での儲け方の説明 (金銀交換レートの違い) ・イギリスは日本をどのよう	T 説明する T 発問する	②	・貿易相手としてはどうで

	に見ていたか ・では、なぜ日本を開国させようとしたのか	S 答える T 発問する S 答える	③	もしい存在 ・ロシアの進出を防ぐため
展開2	○ロシアの思惑 不凍港獲得を目指した南下政策 ○東ヨーロッパ方面からの南下を狙っていたことを説明する ・クリミア戦争 ・ロシア＝トルコ戦争(1875年) ○アジア方面からの南下を狙っていたことを説明する ・北京条約(1860年) →その後シベリア鉄道建設による本格的なアジア進出を目論むように ○19世紀中頃、ロシアは南下政策の一環として日本を狙っていたことを示す ・ラクスマン、レザノフなど ○イギリスは上記を警戒していたため、進出阻止のために、日本を開国させたことを理解させる	T 説明する T 説明する T 説明する T 説明する T 発問する S 答える		
終結	◎イギリスはなぜ清と日本で開国させるための方法を変えたのだろうか	T 発問する S 答える		◎清はイギリスが構築していた世界的貿易システムの中の重要なピースであったため、(銀が流出していたため)絶対に抑えておかねばならないピースであ

				った。一方で日本は、貿易に関する興味はなく、ロシアの南下を防ぐために支配しただけにすぎなかったの で、対応が甘かった。
--	--	--	--	--

【使用する資料】

〈第一次〉

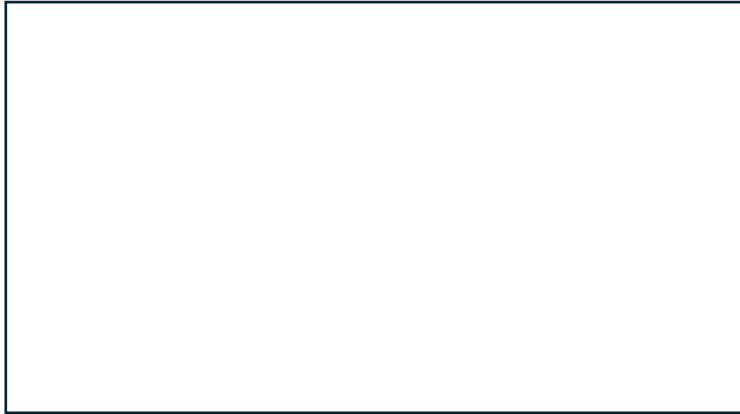
①オールコック『大君の都』

「われわれのつねに増大する欲求や生産能力に応じるためにわれわれはたえずつぎつぎに新しい市場をさがしもとめる。そして、この市場は主として極東にあるように思われる。われわれの第一歩は、条約によってかれらの提供する市場に近づくことである。相手の方では交渉に入る意図をあまりもってはいないのだから、われわれは唯一の効果的な手段をたずさえる。それは圧力である。そして、必要な貿易の便宜やいっさいの権力を与えるという趣旨の文書をえる。のこるはずかに一歩である。それは条約を実施し、実効のある条約にしなければならぬということだ。背景に強圧という手段があってしかるべきだ。そして、ほかの手段をもってしても条約の規定を忠実に履行させることができないなら、強圧的な手段に訴える意志がありそうすることもできるということも知らさなければならない」

②外国船接近数

--

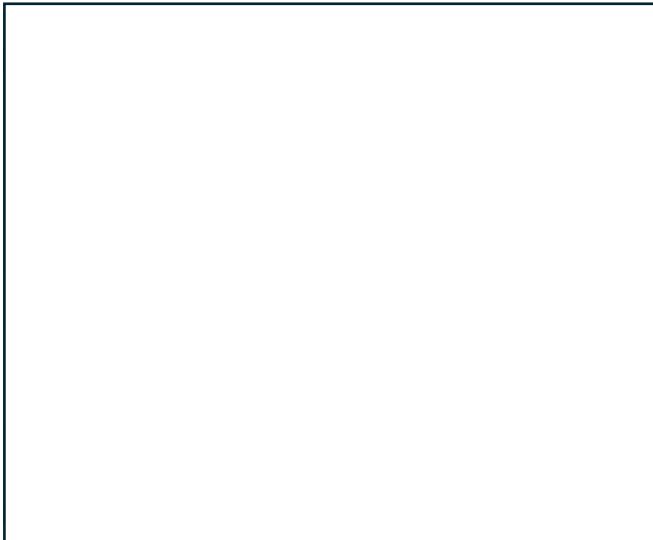
③清皇帝に謁見するイギリス使節



④マカートニー→清(1793. 9. 14)



⑤マカートニー→清(1794. 1)



⑥マカートニーに対する乾隆帝の勅諭(1793年)

「ただ天朝(清)に産する茶、磁器、生糸は西洋各国およびなんじの国の必需品であるから、恩

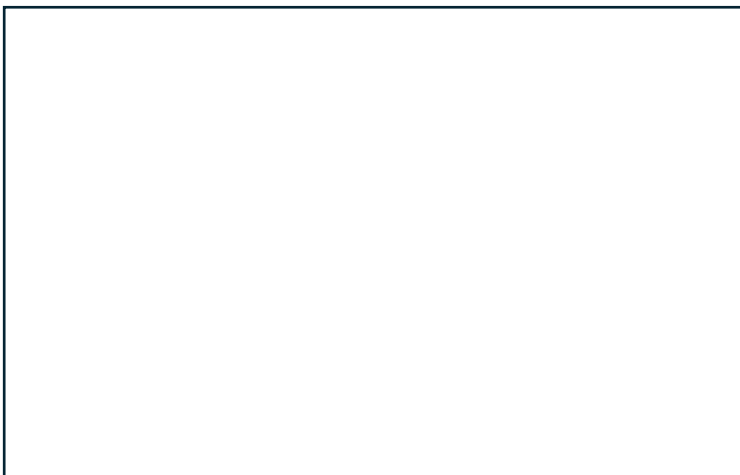
恵に加え、マカオに洋行を開設して日用品を援助し、天朝の余沢に潤うことを認めているのである。にもかかわらず、今、なんじの国の使節は(マカートニー使節団)が定例に反することをいろいろと陳情するので、恩恵を遠人に加えて四夷を撫育する(=可愛がり育てること)という天朝の意に対して無理解も甚だしいと言わなければならない。」

⑦高杉晋作がみた清

「(前略)上海という都会のことを考えてみた。ここでは、中国人はほとんど外国人の使用人になってしまっている。イギリス陣屋フランス人が歩いてゆくと、中国人はみなこそこそと道をよけていくのだ。ここは、主権は中国にあるというものの、まったく、イギリス、フランスの植民地にすぎないではないか。(中略)わが国でも、十分に注意しておかないと、やがてこのような運命に見舞われないとはだれが断定できようか」

〈第二次〉

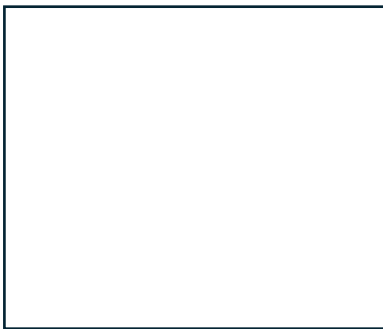
①アヘンとは？



②アヘン貿易の弊害(問いからはじまる歴史総合)



③イギリスが清にあてた手紙



④19世紀イギリスの輸出品



⑤イギリス産綿布が清で売れなかった理由

「イギリスは中国から茶を購入しその代価として銀を支払うという一方的な輸入超過になっていた、それを改善しようとして工場製の綿織物売り込もうとしたが、中国では長江下流の南京を中心とした綿業地帯が発達しており、(中略)遠い距離を運ぶイギリス産綿織物は割

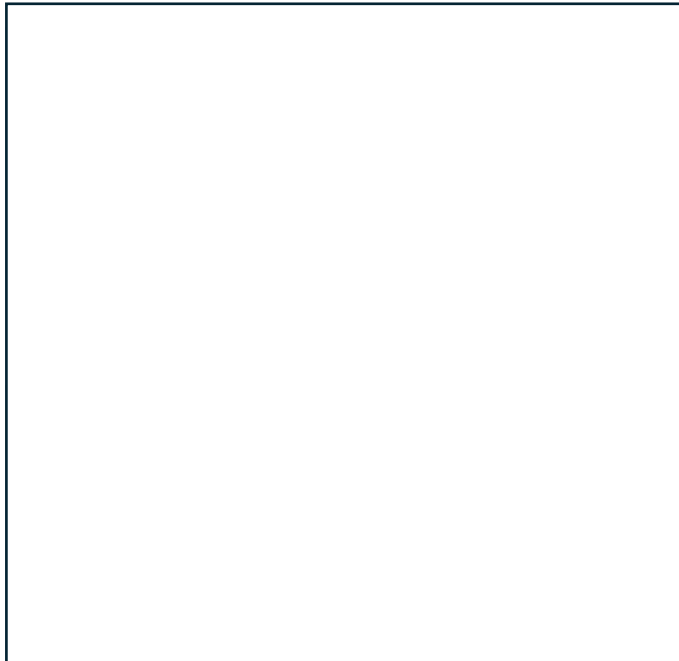
高になったため、インドのように売れなかった。」

⑥マカートニーに対する乾隆帝の勅諭(1793年)(新詳歴史総合)

「天朝(清)の物産は豊かで無いものはなく、もともと外国産に頼って有無を通ずる必要はない。ただ天朝に産する茶、磁器、生糸は西洋各国およびなんじの国の必需品であるから、恩恵に加え、マカオに洋行を開設して日用品を援助し、天朝の余沢に潤うことを認めているのである。にもかかわらず、今、なんじの国の使節は(マカートニー使節団)が定例に反することをいろいろと陳情するので、恩恵を遠人に加えて四夷を撫育する(=可愛がり育てること)という天朝の意に対して無理解も甚だしいと言わなければならない。」

〈第三次〉

①開国後の日本の貿易『新詳歴史総合』、浜島書店、2022 年、p.75。



②イギリスの目的 オールコック「大君の都」

「われわれ(イギリス)の条約の目的が貿易であることはいうまでもない。西洋諸国とくにわれわれは、東洋に大きな権益を持っており、日本はその前哨地である。われわれには維持すべき威信と帝国があり、さらに巨大なる通商を営んでいる。日本がこの通商の額を増大するために貢献できる程度は、大して考慮にあたいしないであろう。対日貿易などはなくともよいであろう」

③イギリスーロシアの思惑(オールコック『大君の都』)

「しかし日本との貿易はさておくとしても、東洋におけるわれわれの威信というものは少しも経費を要せずして艦隊や軍隊の代わりをつとめているひとつの力である。われわれはこの地方において、ロシア、すなわち満洲の沿岸地帯に急速にふえつつあるその経営地と対抗している。ロシアの通商が伸長し繁栄してもわれわれとしてはなんら恐れる必要はない。しかし軍艦とか軍港というような軍事力の優勢は、それほど強い防衛力をもっていない通商にとっては危険の源となる。われわれはたとえ名目的にせよ、条約による権利を日本にもっている間は、われわれの同意なしに征服したり併合したりすることは困難であろう。ロシアはこのアジアの東端で一定の進出政策を推進しているが、他のヨーロッパ諸国が後退すれば、遠からず日本がロシア帝国の一部になることはほぼ確実である。」

I



II



III



IV



指導案 資料一覧

〈第1次〉

①小風秀雅『19世紀世界と東アジア—不平等条約の機能について—』お茶の水女子大学教育・研究コレクション“TeaPot”、117 ページ。

https://www.google.com/url?sa=t&rct=j&q=&esrc=s&source=web&cd=&ved=2ahUKEwiBqbrEqbaCAxVZeXAKHXRRcz4QFnoECA0QAQ&url=https%3A%2F%2Fteapot.lib.ocha.ac.jp%2Frecord%2F6585%2Ffiles%2Fed114.pdf&usg=AOvVaw0g2fFfwu76zh_AllPluXEG&opi=89978449 (閲覧日2023年11月9日)

②山川&二宮 ICT ライブラリ(閲覧日2023年7月5日)

③『10分でわかる世界史 B の流れ 中国史(9)～清の歴史(前半)～』HISTRACE
https://histrace.com/overview_history/first_qing_dynasty/ (閲覧日2023.10.18)

④木村靖二、岸本美緒、小松久男『詳説世界史 改訂版』山川出版社、304－305ページ。

⑤木村靖二、岸本美緒、小松久男『詳説世界史 改訂版』山川出版社、305ページ。

⑥『新詳歴史総合』浜島書店、69ページ。

⑦『新詳歴史総合』浜島書店、69ページ。

〈第2次〉

①『明解歴史総合』帝国書院、62ページ。

②星沢卓也『問いからはじまる歴史総合』東京法令出版、2023年、41ページ。

③『明解歴史総合』帝国書院、61ページ。

④第121回イギリスの自由主義改革

<https://nodai-3-h.ed.jp/application/files/3516/8267/0898/121.pdf> (閲覧日2023.10.25)

⑤『木綿／綿織物』世界史の窓 <https://www.y-history.net/appendix/wh0801-068.html> (閲覧日2023.10.25)

⑥『新詳歴史総合』浜島書店、69ページ。

資料Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳは授業者作成

〈第3次〉

①『新詳歴史総合』、浜島書店、2022年、p.75。

②小風秀雅『19世紀世界と東アジア—不平等条約の機能について—』お茶の水女子大学教育・研究コレクション“TeaPot”、117 ページ。

<https://www.google.com/url?sa=t&rct=j&q=&esrc=s&source=web&cd=&ved=2ahUKEwiBqbrEqbaCAxVZeXAKHXRRcz4QFnoECA0QAQ&url=htt>

ps%3A%2F%2Fteapot.lib.ocha.ac.jp%2Frecord%2F6585%2Ffiles%2Fed114.pdf&usg=AOvVaw0g2fFfwu76zh_AllPluXEG&opi=89978449(閲覧日2023年11月9日)

③小風秀雅『19世紀世界と東アジア—不平等条約の機能について—』お茶の水女子大学教育・研究コレクション“TeaPot”、117 ページ。

https://www.google.com/url?sa=t&rct=j&q=&esrc=s&source=web&cd=&ved=2ahUKEwiBqbrEqbaCAxVZeXAKHXRRcz4QFnoECA0QAQ&url=https%3A%2F%2Fteapot.lib.ocha.ac.jp%2Frecord%2F6585%2Ffiles%2Fed114.pdf&usg=AOvVaw0g2fFfwu76zh_AllPluXEG&opi=89978449(閲覧日2023年11月9日)

前章のまとめとして、県内の公立高等学校で実施した授業をより生徒が「世界の中の日本」を意識するように改善するためには、「生徒に資料を提示し、考えさせる時間を設けること」、「外国の思惑を強調し、それと日本にどのようなつながりがあったかにふれること」、「欧米列強との関わり方を他国と比較すること」に加え、中学校の学習方略とは全く異なるをすべきだということが分かった。それでは、どのような改善が必要か。

まず、単元名を「産業革命がアジアにもたらしたもの」とし、世界で初めて産業革命を成功させたイギリスが日本や清とどのようななかかわり方をしたのかを考えさせる授業構成とした。次に「生徒に資料を提示し、考えさせる時間を設けること」を改善するために、生徒に考えてもらう時間を増やすべく、授業を3時間構成に組織し直した。

では、改善した授業について詳しく説明していく。第1次は「イギリスを中心とする欧米列強とアジアの接近を理解させる段階」とした。MQ を「欧米の接近の結果、清と日本にはどのような変化があっただろう」とし、MA を「清は戦争により開国させられ、列強の植民地のような状態になったのに対し、日本は条約により開国し、不平等な条約を結ぶだけにとどまった」とした。導入では、18世紀末から19世紀にかけてアジアに欧米列強が接近していたことを説明する。当時の欧米列強の勢力図や欧米列強が「市場を必要としている」という文章を見せ、アジアが次なるターゲットとなっていることを示す。次に、19世紀以降日本に近づく外国船の数が増えている資料を提示したり、18世紀末、清の皇帝にイギリスの使節団が謁見している様子を見せたりして、確かに欧米列強は19世紀以降アジア地域を次なる貿易のターゲットとしてみていることを理解させる。展開1では、欧米列強(主にイギリス)接近の結果、清はどのような結果をたどることになったかを説明する段階である。展開1ではイギリスをはじめとする欧米列強が清に接近した結果どのようなことが起こったのかを考える。はじめに、清は歴史的に朝貢貿易を行っていたことを説明する。そうしたなか、マカートニーが清を訪れ、貿易交渉を行ったことを説明する。その際、資料を提示しながら、マカートニーが清を訪れた当初は「アジア的な高貴さ」「華やかさ」など清の皇帝に好意的な印象を持っているが、半年後マカートニーは清を「大きな図体と外観だけにものをいわせ」「ボロボロに傷んだ戦闘艦に等しい」とその評価が一変したことを生徒に読み取らせる。また、当初抱いていた良いイメージから悪いイメージへの推移が起こったことで、清皇帝がイギリスとの自由貿易を断った結果、アヘン戦争やアロー戦争という結果につながってしまったことを示唆したい。次に、実際アヘン戦争、アロー戦争の結果、清はどのようなになってしまったかを、資料を用いながら「中国人の使用人になってしまっている」、「主権は中国にあるというものの、まったく、イギリス、フランスの植民地にすぎないではないか」という、戦争に負けた清の末路について読み取らせる。ここでは、中国開国の主体となったのがイギリスであったこと、中国の開国には戦争という手段が用いられたことを強調したい。展開2では、欧米列強接近の結果、日本はどのような結果をたどることになったかを説明する段階である。日本ではイギリスとオランダが長崎で衝突したフェートン号事件やラクスマンやレザノフが接近したことに触れ、欧米列強が日本にも接近するようになったことを示す。次に、異国船打ち払い令から天保の薪水給与令に幕府が政策を変えたことに触れる。最後にペリ

一來航により日米和親条約、日米修好通商条約により開国したという結果を示す。さらに安政の五カ国条約で、欧米列強と同等の内容の条約を結んだことを理解させる。ここでは、日本開国の主体となったのがアメリカであったこと、日本の開国には条約という手段が用いられたことを強調したい。終結では「交渉をもってしても応じぬ場合は強圧をかける」という資料を提示しながら、日本と清の開国の背景にはどのような考え方の違いがあったのかを考える。その際、イギリスは清に対しては戦争という武力を用いて開国を迫ったのに対し、日本には安政の五カ国条約の一員として加わっただけだという、イギリスから両国への圧力のかけ方の違いについても示唆しておきたい。

次に第2次では「イギリスが清の開国にこだわった理由を考察する段階」とした。MQを「なぜイギリスはアヘンが害のあるものとみなしながら、清に売りつけているのだろうか」とし、MAを「イギリスは清に一方的に銀が流出していた状況を食い止めるため、インド産のアヘンを利用し、銀を回収しようとしたため」とした。導入では、清とイギリス間のアヘン貿易について簡単に説明する。はじめに復習としてアヘン戦争の結果、どのようなことがイギリスに認められるようになったかにふれる。ここでは、港の開港、租界の設置など様々なことが認められるようになったが、その中でも「アヘン貿易が合法化」されたことに着目させる。次に資料を使いながら、アヘンが中毒性の高い麻薬であり、イギリスから清にアヘンが大量に流入したことで清にはアヘン中毒者が蔓延し、貿易の面でもアヘン購入のために銀が大量に流出したことをおさえる。その一方で、イギリス側もアヘンが害のあるものだとして認識している点にふれ、MQへとつなげる。展開1では、当時のイギリスが世界に築いていた貿易システムについて図を使って説明する。はじめにイギリスが世界で初めて産業革命を成功させた国であり、その結果機械の開発などにより、生産量が高まっていたことを復習する。またその結果、大量に生産された綿織物が国内市場だけでは売りさばけなくなり、植民地であったインドに大量に輸出していたことを確認する。しかし、イギリスが大量に綿織物に生産することができたのは単に生産力が上がっただけでなく、大西洋三角貿易の一つのピースである、西インド諸島やアメリカ南部からの黒人奴隷を使役した綿花プランテーションにより、安く綿花を仕入れることができたことも改めて説明したい。つまり、展開1ではイギリスは植民地で奴隷制プランテーションを行い、大量生産した綿花を安価で仕入れ、本国で大量生産し、植民地であったインドに大量に売りつけるという貿易システムを構築して、儲けていたことを押さえておきたい。展開2では、展開1で示したイギリスの貿易システムに清がどのように関わっていたのかを考察する。まず、18世紀後半の清とイギリスの様子から、イギリスが清から一方的に陶磁器や茶を買うだけの片貿易であったことを説明する。ここで多くの生徒はなぜインドには綿織物を売りつけていたのにもかかわらず、清には売らなかったのかという疑問を持つと考えられる。そこで、清国内では綿織物が生産されており輸入する必要性がなかったこと、資料より当時の清は豊かであったため、外国から新たにモノを輸出する必要性はなかったことを説明し、そのため清とイギリスの貿易ではイギリスが清に一方的に銀を輸出する関係であったことを理解させる。また、一方的に銀が輸出することで、イギリス国内の銀の量が減ること、イギリスは儲けたいという思惑があるにもかか

ならず、清との貿易では利益が得られないことを説明する。そこで、話を授業導入部に戻して、ほかに輸出するものがなかったため、イギリスはインド産のアヘンを利用し、儲けようとしたことを説明する。次にインドからアヘンを輸出することで、茶や陶磁器の購入でイギリスから清に銀が、アヘンの購入で清からのインドに銀が流出したことを説明する。さらに、ここでイギリスとインドとの関係についても、インドがイギリス産綿織物の大量輸出地であったことを再度確認し、インドからイギリスに大量に銀が流出していたことを説明する。最後に、イギリスと清、インドの関係について、「インドから中国にアヘンを輸出し、銀を得ること」「その銀を、インドに綿織物を大量に輸出することでイギリスが回収していたこと」をまとめる。さらに、展開1で出てきたイギリスの貿易システムに清が加わると、「イギリスはアメリカ大陸から安価な綿花を大量に輸入し、本国で加工し、インドに大量輸出した結果、清からの銀の流出を食い止めることに成功した」とまとめる。終結では、MQ を再度生徒に問い、答えを求める。

第三次は「日本と清に対するイギリスのアプローチのかけ方の違いを考察する段階」とした。ここでは第1次の終結で示唆した内容を深く検討していく。MQ は「イギリスはなぜ清と日本で開国させるための方法を変えたのだろうか」とし、MA を「清はイギリスが構築してきた世界的貿易システムの中の重要なピースであった(銀が流出していたため)、絶対に抑えておかなければならないピースであった。一方で日本は、貿易に関する興味はなく、ロシアの南下を防ぐために支配しただけにすぎなかったため、対応が甘かった」とした。まず、導入では、安政の五カ国条約締結後の日本の貿易相手国を示し、イギリスが最も多かったことを示す。次にイギリスとの貿易で何が輸入されていたかのグラフを示す。その結果、毛織物や綿織物が一番多かったことを示す。このような2つの状況から、イギリスは日本とは容易に輸出したこと、日本にはイギリスの思惑通り毛織物や綿織物を輸出できていたことから、日本にはアヘンを輸出しなかったことを示す。ここで第一次で示唆した内容をもとにMQ を提示する。展開1では、導入説明した以外にも、日本と外国の金と銀の交換レートの違いを利用し、外国が儲けていたことを説明する。次に「イギリスが対日貿易には興味がない」と語る資料を提示し、なぜ日本を開国させようとしたのか、背景にロシアの南下政策があったことを説明する。展開 2 では、まずロシアが不凍港獲得のために各地で南下政策を実施していたことを復習する。東ヨーロッパ方面では、南下のためにクリミア戦争、ロシア＝トルコ戦争を引き起こしたが、いずれも失敗に終わったことを説明する。一方でアジア方面でも南下政策を行い、清とイギリス・フランスの講和条約の締結の仲介役の役割を果たしたため、沿海州を獲得したこと、そして更なる進出を図ろうとしていることを説明する。また、第一次でも触れたように19世紀になるとロシアはラクスマンやレザノフを送り込んで、日本への南下を試みていたことも確認したい。以上のような理由で、イギリスはロシアを警戒し、南下を防止するために日本を開国したことを理解させる。終結では、MQ を再度提示し、日本にはロシアの南下を防ぐためと理由で開国に携わったこと、清には自国の貿易システムに組み込むために(儲けるために)開国させたという、イギリスの開国への熱意の違いを理解させたい。

以上のような授業に改善することによって、生徒に日本史と世界史を関連付ける考察する授

業、「世界の中の日本」を意識させる授業になるのではないかと考える。

おわりに

本研究は、自国史、すなわち日本史と世界史を関連付けて、世界の中で日本がどのような位置づけだったのかを生徒が考察する授業の開発することを目的とした。その結果、意義と課題について記述する。

本研究の意義は歴史総合の「近現代の歴史の変化に関わる諸現象について、世界とその中の日本を広く相互的な視野から捉える」という理念に基づき、日本と清、清とイギリス、日本とイギリスという3カ国を比較することで、自国史と世界史を関連付ける授業開発ができたことにある。その中で、中学校歴史分野の学習方略のままでは、日本の開国は歴史上大きな出来事であるという印象を与えてしまいがちな単元において、前述の A(日本)と B(清)に隠れた因子 C(イギリス)を加えて、A、B 間の相関関係を考えるパターンの方略を用いることで、日本の開国は世界の中で見れば「ついで」の出来事にすぎなかったというように「世界とその中の日本」を強調できた。

次に本研究の課題を3点挙げる。1点目は、今回提案した授業では、産業革命や大西洋三角貿易などの既習事項を生徒がわかっているものとして扱い、深く触れていない。そのため、既習事項の理解が定着していないと本授業の理解も難しくなるだろう。したがって、生徒の既習事項への理解度を事前に十分に把握しておかねばならない。2点目は、「日本の開国は世界史の中から見れば取るに足りない出来事であった」という教材研究の成果をうまく授業化できなかったことにある。特に改善授業の第3次展開1で、金銀の交換レートの違いについて説明するときに、イギリスだけにとどまらず、ほかの外国の国から見ても重要な貿易相手ではなかったことが強調できれば良かった。3点目は、自国史と世界史の関連付けの方法に関して、A(日本)と B(清)の相関関係を考えることにおいて、隠れた因子を複数加え隠れた因子 C(イギリス)、D(アメリカ)の因果関係なども複合的に考察するパターンも考えらえた点にある。この方法を採用すれば、前述のように「日本の開国は世界史の中から見れば取るに足りない出来事であった」ことを強調できたかもしれない。

今後も本研究で考察した自国史と世界史を関連付けることを意識し、授業づくりに取り組んでいきたい。

参考文献一覧

岸本美緒、鈴木淳『歴史総合 近代から現代へ』山川出版社、60-65ページ。

『歴史総合 近代から現代へ ノート』山川出版社、38-43ページ。

矢吹芳洋『高校社会科の「再編」と世界史必修をめぐって』専修大学社会科学研究所月報、1991年、12ページ。

<http://www.senshu-u.ac.jp/~off1009/PDF/geppo1991/smr338.pdf>

(閲覧日2024年1月12日)

『提言「歴史総合」に期待されるもの』日本学術会議史学委員会高校歴史教育に関する分科会、2018年。

<https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-23-t228-2.pdf> (閲覧日2024年1月11日)

文部科学省『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 地理歴史編』

https://www.mext.go.jp/content/20220802-mxt_kyoiku02-100002620_03.pdf (閲覧日2024年1月11日)

【巻末資料】県立高校実施授業(2023年 7 月19・20日) 文字起こし

県立高校実施授業文字起こし(2023. 07. 19) 第1次

時間	教師の発言	生徒の発言
2:20	(自己紹介、プリント等の説明) 今日は前回中国の話をしたと思うんですけど、今回から日本の話に入っていきます。 なので、皆さんに今どれだけ知識があるかなということで、確認をしたいので振り返りシートを出してください。 一番上に【学習前】「日本はなぜ開国したか」っていうのがあると思います。 今まで中学校とかで習った知識とかをもとに書いてみてください。日本はなぜ開国したのか、3分ほど時間をとります。	
4:57	解けた人も解けてない人もいますかと思えます。一応ちょっと聞いてみただけなので、思い出しながらまた書いてください。明日の授業が終わった後に同じことを聞くので、そのときは書けるようにしてください。	
5:17	じゃあ、早速授業の内容に入っていきます。補足プリントの①を出してください。横向きのやつですね。出しましたかね。そこに、まあ日本の開国ということなんですけど、日本、ずっと、中学校の時にやったと思うんですけど、鎖国の状態にありました。で、それがどう開国の、開国っていうふうにかかっていうのを今日勉強していきます	

5:48	す。 まず見てほしいのが左上の図ですね。日本に接近した外国船の数っていうことで、まあここに4カ国ほど書いていると思います。今回ちょっとイギリスとフランスは抜かして考えてほしいんですけど、ロシアとアメリカ、かなり多くの回数、日本に接近してきてるのが表からわかると思います。1778年以降、1855年まで。かなり多くの回数、日本に近づいています。じゃあ皆さんにちょっと考えてほしいのが、ロシアとアメリカ、どのような思惑をもって、日本に近づいてきたのか、というのを考えてもらいたいと思います。補足プリントの②を出してください。そこにアメリカの場合、そしてロシアの場合という風に、それぞれ日本に接近してきた思惑が書いていると思います。7分ほど時間を取るので、それぞれアメリカの思惑、ロシアの思惑、どのようなものがあつたか考えてみてください。	
13:47	はい、じゃあある程度皆さんかけてるみたいなので、近所の人と確認してみてください。難しかったと思うので、わからなかった人、隣の人とかに教えてもらいながらですね、どんなこと書いたのか確認してみてください。	
15:00	じゃあ、聞いていきたいと思います。今日は19日ですので、19番さん。〇〇さん。まず、アメリカの思惑、どんなのを思い浮かべましたか。	

16:38	あーなるほど、ありがとうございます。拠点みたいな感じにしたいってことですね。で、今言ってくれたところに大事なところがありました。太平洋に進出したいって言ったんですけど、当時、一番上の資料からわかるように「神に与えられた使命として太平洋を越えてアジアに」ってということで、アメリカの領土っていうのが、大西洋側に、大西洋、国境が、どんどんアメリカ大きくなっていきます、拡大していきましたよね、その結果国境が太平洋側に到達したっていうのもありますね。 では、ほかの観点から。39番〇〇さん、どうでしょうか。 貿易を拡大させたい、ということで下の資料からですか？ 貿易の拡大をしたい、それ実は共通する思惑に出てくるので、先に書いときますね。 はい、ちょっと難しかったかなと思うんですけど、一つ目の思惑、貿易の拡大も思惑として、ロシアにも共通する思惑なんですけど、アメリカだけの思惑としては、そこに『タイムズ』という資料に書いていると思います。「アメリカ政府はヒューマニティの立場からも日本のこの態度を改めさせるべきである」「このような権利を侵害する野蛮国」 通商関係否定って言ってくれました。「このような権利を侵害する野蛮国を排撃することは～」とあります。つま	アメリカ船が太平洋を横断するときの中間地点として、日本を使いたい 貿易を拡大させたい。
--------------	--	---

19:03	り、日本のそういう態度を改めさせたかった。まあ改めさせるっていう風に言っはいるんですけど、すごいアメリカ上から目線じゃないですか？日本は野蛮だから私たちが開国させねば、っていう。これってある種、自分たちの侵略行為っていうのを正当化するものだったんじゃないかなといえると思います。支配を正当化させるために、日本に干渉するぞ、日本に侵略することは正しいぞ、日本の態度を改めさせるのは自分たちの使命だっていうような感じです。 じゃあ続いてロシアの思惑聞いていきましょう。後ろいって、〇〇さん。 ありがとうございます。はい、言ってくれた通りですね、不凍港がほしかった、輸出のための不凍港がほしい、冬になったら港が全部固まってしまうから、凍らない港がほしかったんですね。クリミア戦争の話の時にも、不凍港ほしいっていうような話が出てきたと思います。 では、共通する思惑としてさっき貿易の拡大、または市場の拡大っていうのがさっきあげてくれたと思います。もう一個思いつく、共通の要因②のところですね、それを使いながら、ちょっと隣の人ともう一個の要因何だろうっていうのを考えてみてください。2分ほど時間取ります。下のイラストと表から。	不凍港を探して、～を進出したい
19:55		

21:34	では、聞いてみましょうかね。〇〇さん、どうでしょうか。 わかりました。〇〇さんどうでしょうか。 では、前にいって〇〇さんどうでしょう なんで来やすくなったかわかりますか 今言ってくれました、ペリーのところ、もくもく煙が出ていると思います。マゼラン、初めて世界一周したって言われるマゼランの時代はただの木製の船だったのに対し、ペリーはこの蒸気船っていうのを使ったがために早く来るように、来ることができるようになりました。つまり、技術革新ですね。 共通の要因としていえることは、それぞれの国内での産業が発達したために、商品売るための場所が欲しくなった、そして技術が進歩したっていう、産業の発展的要因がここには絡んでいます。 今皆さんが資料からくれて挙げた以外にも、思惑っていうのはまだまだあったみたいです。ノートに入っていきます。ノートのまず、④ですね。アメリカの思惑として、もう一個あったのが④捕鯨船の活動。捕鯨船の活動がありました。そういう思惑もあったみたいです。 加えてロシアの方は、不凍港の獲得のために、何回か使節みたいなのを送っ	わかりません。 (首を横に振る) 日本に来やすくなった 技術の革新
--------------	---	---

24:09	ています。まず最初に日本にやってきたのが①ラクスマン。 ラクスマン一行が根室に来航します。北海道の根室ですね。しかし、それに対して幕府は紛争を回避するために、ここじゃ貿易できないので、長崎まで行ってくれということで、ラクスマン一行を追い返しています。その後じゃあ、ラクスマンの一件で、長崎に行ったら貿易させてくれるんだっていう風に気づいたロシアは、次、②レザノフ。という人を送っています。しかし、これに対しても幕府は、いうことを聞いて長崎まで行ったレザノフ一行をまたも拒絶しています。 このように19世紀に入ってから日本にはかなり多くの外国船が接近しています。外国船が接近するんですけど、日本っていうのがその時にどんな対応をとってきたのかっていうのを皆さんと今日は一緒に考えたいと思います。ということで今日は皆さんと一緒に、「外国の接近に対する日本の対応が変化したのはなぜか」っていうことで見ていこうと思います。	
26:26	日本の対応、4つに分かれています。まずは一番目ですね。一番目、日本は外国に対してどのような対応をとっていたのかっていうのが⑤ですね。異国船打ち払い令というものを作りました。 (プリント等の説明) 時期は1825年頃。じゃあ自分が配った補足プリントの②の裏面ですね。見	

26:56	てください。そこに異国船打ち払い令ってどんなものかなっていうのを書いています。注目してほしいのが、上から二番目ですね。「外国船が近付いたら、その場に居合わせた者達で迷わず打ち払い、逃げた場合は船を出して追う必要なくそのままで良い。もし強硬に上陸してきたならば捕縛しても打ち殺しても構わない。」ってような内容が書いています。つまり、どんな内容だったかという、外国船が接近したら追い払う。ってような内容が書かれていました。 じゃあなぜ日本はこんな、外国船が来たら打ち払おうとしていたのかというとその理由が③。中学の時のもやったと思います。日本は鎖国の状態にあったためです。 線を引っ張っていただきます。③()の近くですね。中国。朝鮮、琉球、オランダ以外の国と関わりを持たない。ノートですね、③()の前のところ、線をひいていただきます。 この四ヶ国とは関わりを、四力国以外とは関わりを持たないために、この異国船打ち払い令っていうのを行っていました。出していました。 じゃあ次ですね。最初はこのような対応をしていた日本ですが、あることをきっかけにその内容を改めることになります。日本の二個目の対応、それが⑥天保の薪水給与令。 これは1842年から出されています。じゃあその内容を見えます。補足プリント②の裏側出してください。注目	
-------	--	--

31:00	してほしいのは、上から3行目ですね。 「そこで外国船を見受けたならば、よく事情を取り調べ、食料・薪水などが不足して帰国することが困難な場合は、望みの品を適切に与え、帰国するように言い聞かせよ。ただし、上陸させてはならない。」ということが書かれていると思います。 さっきとずいぶん対応が変わりましたね。さっきは外国船追い払えという風に言ってたんですけど、今回は事情を聴いて、望みの品を与える。 はい、じゃあなんでこのように、なぜこのように対応が変わったのか、ヒントはこの1842っていう年号になります。ちょっと考えてみてください。1分くらい考えてみてください。 はい、じゃあ近くの人と話し合ってみてください。なんで対応を改めたんでしょうか。 じゃあ、聞いてみましょうかね。〇〇さんどうでしょうか。 前言って〇〇さんどうでしょうか アヘン戦争でどうなりました？ 今言ってくれました、そうです、中国でアヘン戦争があってそれによって清が負けてしまったこと、かなりコテンパンにやられてしまったことを受けて、それが日本に噂で入ってきて、外国に歯向かうと大変なことになるらしいぞってということで、改めています。	(首を振る) アヘン戦争 中国が負けた
35:43		

36:08	で、それに加えてもう一個要因があると思います。先ほどアメリカのところで日本の態度を改めさせるんだ、というようなことがあったと思います。書いてるとおり、2行目に「海岸に漂着すると乗組員を捕虜にし、投獄して、実際に殺してしまうこともある」、まさしくこっちの①の内容と一緒にじゃないかなって思うんですね。 いくらアメリカの正当化だったとはいえ、この状態のままだといつ侵略されても、いつあいつらを排撃するぞっていうふうにアメリカがやってきてもおかしくないので、外国の侵略の原因を作らないためにも代えたんじゃないかなって思います。 このような2つの、アヘン戦争と侵略の原因を与えないっていう理由2つから、さらに日本は対応を改めないといけない日が来るわけです。ここまで出して丁寧に帰ってくれ、帰ってくれといっても、以後も外国っていうのは接近してきます。アメリカ艦隊が浦和にやってきて通称を要求したりしてたびたび、またやってくることになります。そして、その対応を改めることになった最大のきっかけっていうのが、みなさんがなぜ日本は開国したかのところで書いてくれた人もいると思うんですけど、⑧ペリーが来航したことです。また、対応を改めることになります。ペリーは大統領の国書をもって、日本にやってきます。1853年です。4隻のでっかい巨大な船をもって、日本を威圧しながら、上陸してくるわけです。そ	
-------	---	--

38:50	こで、「大統領からの国書を預かってきました、来年までに返答ください」というふうな、威嚇しながらそういう風なことを言ってくるわけです。 それに対して、このペリーの国書持参に対して、対応したのが⑨老中の阿部正弘という人でした。2つ、彼は対応を取ります。一個目の対応が⑩台場、台場って砲台のことなんですけど、砲台を建設することで、国防っていうのを、日本の国を守ろうっていうように、外国船が来た時の対応っていう点から一個しています。 もう一個やっていることが、さっきアメリカの大統領から国書をもらったって言ったんですけど、それに対して色んな人に意見を訪ねます。朝廷、そして諸大名、彼らに意見を求めるようになります。その結果、ノートに書いている通り、今まで、従来幕府の政治に発言権を持たなかった人々の政治参加を促すということで、この両者の発言力っていうのがアップしていきます。 いろんな人に意見を聞いた結果、日本はどういう対応をとることにしたかというと、⑪、中学校の時に習っているかと思いますが、日米和親条約というのを結ぶことになります。これは再び、一回帰ったけどもう一回来航したペリーと結ぶことになります。 内容、どのようなものだったかというと、アメリカに食料、燃料を与える。薪水給与令と同じような内容ですね。そしてそれに加えて、港を開くように要求します。そして、開かれた港っていうのが、⑫、静岡県の下田、そして北海	
-------	---	--

47:16	道の箱館。2 港を開講することを要求します。これらによって、日本は開国されていきます。注意してほしいのが、箱館の箱の字、今と違って箱なので注意してください。 じゃあ最後ノート⑬、⑭、⑮、⑯のところ見ていきます。 (以下のノートの説明)	
-------	--	--

県立高校実施授業文字起こし(2023.07.20) 第2次

時間	教師の発言	生徒の発言
1:37	今日はノートの42ページ、43ページ 中国の開港と日本の開国③について やっていきます。 昨日⑭蕃書調所の所を間違えていた ので訂正をお願いします。 日本の4番目の対応ということで前 回港を開かせる、そして薪水給与とい う日米和親条約の内容だけで事足り なかったアメリカはさらに日本に接近 してきます。 きっかけとなったのが②領事館のハリ ス、ハリスという人が第二次アヘン戦 争、つまりアロー戦争を持ち出して、 言うこと聞かないとこういうことにな るぞ、と半ば脅しのようなことを使い ながら日本に説いてきます。 その結果①日米修好通商条約。時期 は1858年です。何が行われたかと いうと2つあります。まず1つ目は貿 易が開始されます。前回は港を開くだ けだったんですけど、今回は市場とし て、追加としてそこに書いてある、神 奈川、長崎、函館、新潟、兵庫の開港 と、江戸と大坂の開市。図説等に載っ ていると思いますので場所について はチェックしといてください。港が開 かれたのと市が開かれたのというの を抑えといてください。それに加えて 不平等条約ですね。中学の時にも習っ たと思います、その前のアヘン戦争の 時にもやったと思いますので内容を 聞いてみましょう。	

7:15	そうですね、③領事裁判権を認める。 もう1個は何でしょうか。 ありがとうございます。④関税自主権がない。 こういう内容で日米修好通商条約が結ばれたわけなんですけど、中学の時習ったと思いますけど、これは条約改正するまでにかなり多くの時間を有しています。今後日本のネックとなるような条約がこの条約です。この内容で他に5つの国と同じ内容で5つの国と結んでいるので、安政の5か国条約ともいわれています。 今日皆さんと一緒に考えていきたいのは、前回やった日米和親条約、日米修好通商条約2つの条約は日本にどのような影響を、なぜ与えたのかというのを一緒に考えていきたいと思います。 では先ほど配ったプリント、補足プリント②7月20日分を出してください。2つ大きな影響を与えたと言われています。まずは経済的な、経済的な要因についてみていきたいと思います。10分、7,8分ほど時間を取るののでそこに書いてある設問に答えてください。どうぞ。	領事裁判権。 関税自主権がない
16:39	近くの人と意見交換してみてください。	

18:08	文章で答えるところは難しかったと思うので 1 番最初のところだけ聞いて、あとは一緒に確認していけたらなと思います。 貿易相手と場所について聞いてみましょう。 そうですね、イギリスが 1 番多かったです。グラフから分かると思いますが⑩横浜です。 日本で起きた困ったこと事例1をまず載せています。簡単に言うと日本と外国の金銀の交換レートが違ったために日本から金が大量に流出してしまったというのが困ったことの 1 つ目です。日本から金を持ち出して外国で銀に交換すると 4 枚の銀が 12 枚に増えるというような感じです。メカニズムはそこに書いてあります。その結果何が起こったかというと、日本政府は対策を取ります。小判の質を落とすこと。今まで小判 1 枚で買えていたものが小判 3 枚で日本全国にお金が大量に出回るようになる。つまり深刻なインフレが生じることになる。物価がどんどん上がっていくことになる。 困ったこと2のところでは日本の輸出品として多いのが⑪生糸、⑫お茶。この 2 つのグラフを見て何がわかるかということ輸出されてる生糸や蚕卵紙の物価が高騰しているということが分かります。これは外国用に、輸出用に商人たちが生糸や茶や蚕卵紙を買い込んだことにより、一般の人が買う	貿易相手がイギリスで、場所が横浜です。
-------	---	----------------------------

	値段が上がったというようなメカニズムになっています。 困ったことの3つめですね、1866 年以降グラフを見比べたところが輸入の方が大きくなっています。なので、^⑳輸入超過。輸入超過で何が困ったかというを書いてくれている人もいますが貿易が赤字になるもあります。輸入が多いということは外国製の商品が大量に日本に入ってくることになります。そこにあるように綿織物や毛織物がたくさん入ってきます。代表的なものがイギリス産^㉑織物。イギリス産の安くて質がいい織物が日本に入ってくることで日本の織物産業が衰退していくことになります。 物価が上がったり、国内の産業が衰退したりしたため民衆の多くは生活難に陥ります。というのが経済的要因として考えられることです。	
27:56	この2つの条約は政治的にも大きな影響を与えます。では政治的影響についてみていきます。日米修好通商条約が結ばれたときに主導権を握っていた人物が^㉒井伊直弼。彼何したかという、本当は朝廷の許可が必要なんですけど、朝廷の許可を得ずに勝手にこの条約を結びます。勝手に条約を結んだり、もう 1 個。図説の 74 ページに詳しく載っているんですけど、74 ページの幕府の動きのところですね、後継ぎ問題がありました。将軍の後継ぎ問題があって紀州藩の徳川慶福と一橋家の徳川慶喜、どちらを将軍にするかという争いがあったんですけど、この	

	井伊直弼は慶福、後の将軍家茂、家茂を将軍にするっていうのを強引に進めていきます。許可なく条約を結んだり、後継ぎを独断、断行して決めたりというような強気な体制だったので彼を批判する人も多くいました。彼を批判する人たちに対しても彼は強行突破を図ります。それが⑦安政の大獄。 なんで彼は強気な政策ばかりを取ったのかという、皆さんに考えてもらいたかったんですけど、時間の都合上自分が言うんですけど、前回やった阿部正弘が朝廷や諸大名の意見を聞いたので、彼らの発言力が強くなってきた、のに対抗して幕府って強いんだぞ、強い幕府をアピールするために独裁にも近い強硬政策を取ろうとしました。しかし、それも長くは続かず彼は⑧桜田門外の変で暗殺されてしまいます。 彼は強い幕府を作ろうとしたものにも関わらず、彼は太老というとても高いポジションについていたんですけど、その高いポジションの人が暗殺されたってことで、彼の思惑とは反して、幕府の権威はどんどん低下していくことになります。 じゃあこの下がった権威をどう回復しようかということで現れたのが老中安藤信正という人が現れて、彼は何をしたかというと⑤公武合体。公は朝廷、武は幕府で、それが合わさるというこ	
--	---	--

	とで、落ちてしまった権威を回復しようということで朝廷の力を借りて、その地位を回復しようとしてしました。で、何したかというと政略結婚、家茂が当時の孝明天皇の妹の和宮という人と結婚することによってこの公武合体というのを進めようとしてしました。 しかし、世論が…(7 番やり忘れ)尊王攘夷思想という天皇を敬って外国を追い払うという思想が当時芽生えてたので、一部の人が天皇は尊い存在になのに幕府と手を組むなんてけしからんというような感じで、また安藤さんに襲い掛かって、結局これもなあな状態になっちゃいます。 さらに老中という重要なポジションにっていた人が暗殺まがいのことをされるので、さらに幕府の権威は低下していくというのがこの流れです。 さっき言った尊王攘夷という思想なんですけど、これを強く唱えていたのが長州藩です。今からこの時代に起きた時代の流れというのを簡単に説明するんですけど、わかりやすいように図で説明します。これはノートに書いてあることなので、ノートとらなくて大丈夫です。 ここで ③のところ、大きな力を発揮するのが長州で、長州、薩摩、幕府と3つに分けて流れというのをみていこうと思います。 長州藩は朝廷を自分たちの味方につけようと考えていました。1863 年朝廷の命として上洛した将軍家茂に、攘夷というのを約束させます。その結果	
--	--	--

	どうなったかという、幕府に天皇の命令だから攘夷することを許してください、幕府に攘夷していいよというのを言わせる、自分達が言わせたので長州は攘夷というのを決行します。約束通り攘夷を決行するんですけど、参加したのは、下関を通りかかった外国船を片っ端から攻撃していきます。それが 2 番のところ。 その間薩摩藩にも動きがあります。生麦事件という事件があるんですけど、薩摩藩が江戸からの帰り大名行列で歩いていたら、イギリス人が大名行列の前をシューっと横切って、薩摩藩士はそのイギリス人を切りかかっていく、そういうことで大問題、国際的な大問題、日本人がイギリス人切ったぞーみたいな大問題になります。その結果イギリスから報復を受けます。それが⑨薩英戦争。 この結果イギリスに薩摩は今まで自分たちの藩の力に実力があつたんですけど、イギリスからコテンパンにやられることになります。ていうのが薩摩の動きなんですけど、この間も長州はめきめきと力をつけて幕府の脅威になっていました。幕府であつたり薩摩であつたりの脅威になっていました。脅威になっていましたので 4 番、薩摩藩は会津藩、幕府と結んで、長州藩の勢力を京都から追放しようとしてました。それが八月十八日の政変という事件です。 幕府と薩摩が協力して長州藩を追い	
--	---	--

	出そうとします。これに対して長州藩はやられっぱなしじゃ気が済まないということで、⑩禁門の変というものを起こします。幕府側と交戦します。しかしこの反抗も空しく長州藩、敗北に終わります。 よしじゃあ今禁門の変でやられて長州は力が落ちているんじゃないか、今がチャンス徹底的に倒そうということで、それに追い打ちをかける ように幕府は⑪第一次長州征討というものを敢行します。また薩摩と幕府が協力して長州を打ちます。この結果長州は、もうこれにもやられて禁門の変にもやられて、さらに長州征討というのもやられて、もう力が残っていなかったため降伏をします。これだけでも長州藩コテンパンになってるんですけど、そこにさらに追い打ちをかけるようにここで下関でいろんな国の船に爆弾、大砲とかで攻撃していたため、その報復というのがここでなされます。それが四国艦隊下関砲撃事件というのが起こります。ノートにはないです。その結果何が起こったかというと、外国というのはかなり強いというのを長州藩、ずっと外国を追い払おう追い払おうと言ってたんですけど、外国って強いんだなっていうのをここで知ります。 同じように今までは薩摩藩と長州藩で敵対していたんですけど、薩英戦争でイギリスにコテンパンにされたこと、四国艦隊下関砲撃事件で外国がどれくらい強いのかという脅威を知ったことを次第に外国に打ち勝つというの	
--	--	--

	は無理なんじゃないかと思った薩摩と長州が、だんだんと 攘夷は無理だと知ったことによって、だんだん近づいていきます。とばして⑮なんですけど、その結果、両者が結びついた結果、坂本龍馬の仲介で⑮、薩長同盟というのが結ばれることになります。 (その後プリント回収の指示など)	
--	---	--